

## 環境審議会（H20.12.24）における質問に対する回答

H21.1.29

水・大気環境課

### 1 水質環境基準の類型指定見直し関係

質問1（大越委員）田付川と濁川では、平成11年度のBODが前後の年度比べて高い。何か理由はあるか。

回答1 河川のBODについては、流況や降水量などの気象状況などに影響されるものと考えられます。平成11年度及びその前後の年度の降水量など気象状況や汚濁源となるような事案を調べましたが、BOD濃度が高くなるような情報は得られず、原因はよくわかりませんでした。

なお、田付川と濁川は流量が少ない中小河川ですが、流量の少ない河川の場合、濃度の変動が大きくなりやすい傾向にあると言われてしています。

質問2（長林委員）荒川下流と田付川下流については、BODが低下傾向にある。社会的な要因なのか、取り組み等があるのか。

回答2 河川の汚濁の原因の大きな要因に生活系排水があります。県では、平成7年度に「福島県全県域下水道化構想（平成16年度見直し）」を策定し、汚水処理人口普及率100%を目指しています。また、単独処理浄化槽の廃止（平成13年4月）や合併処理浄化槽に対する補助制度などにより汚水の処理が進められています。

福島市では早くから下水道の整備が進められており、平成19年度の汚水処理人口普及率は76.2%になっています。また、荒川については、地元住民などからなる「ふるさとの川・荒川づくり協議会」があり、河川美化活動などを行っています。

喜多方市については、下水道や農業集落排水処理施設、合併処理浄化槽の整備などにより、平成19年度の汚水処理人口普及率は56.6%になっています。また、ほたるの会や会津イトヨ研究会など水環境に係る地域の活動が行われています。

このように、汚水処理の普及と地域住民の活動等により水質の改善が図られているものと考えています。

質問3（堀金委員）7地域が生活排水対策重点地域に指定されているが、指定の効果はあるか。

回答3 重点地域に指定された河川のBODは、いずれも低下の傾向にあり、下水道や合併処理浄化槽の推進など生活排水対策による効果があったものと考えています。

例えば、小泉川のBODは平成5年度に5.6mg/Lであったものが、平成19年度には3.0mg/L、逢瀬川については同じく5.8mg/Lが4.5mg/Lまで改善しています。

### 2 水生生物の保全に係る水質環境基準の類型指定関係

質問1（長澤委員）めだかなど生物A、生物Bの分類表にない魚類がほかにもいるが、これらの魚類もこの表に含めて評価すべきではないか。

回答1 「主な魚介類の淡水域における水域区分の分類」の表は、国の中央環境審議会の専門委員によってまとめられたものであり、比較的低温域を好む水生生物と比較的高温域を好む水生生物の指標として参考とするものです。他の魚介類については、水温適性のデータがなかったり、水温の適応範囲が広く指標となりにくいなど、現段階では活用は難しいものと考えられます。